

●満洲の日露連絡  
 調査役員 岡本博士 談  
 △日露鐵道の連絡  
 日露鐵道の連絡に就ては略は新聞に出て居りますが、實は露西亞と吾々の會社のみならず内地との連絡の下相續が出来て十一月頃には其相續を取り掛ると思ひます、現在我が國と露西亞とに接續する線路は門司を経て大連に往つて濱州に乗つて哈爾濱に出て向ふの線に接續するので、教貨に出て浦鹽を經由して露都に往くとの、二線路が御座いますが、直行は二回で他の一回は莫斯科で乗換へる、こう云ふ急行車が今はありませす、此二つを滑かして使はふと云ふので、森に吾々の會社は、露都の連絡が云ふいから、大連を經由して一つの切符で露西亞からメット日本に來られるやうに、大連の經由が一つ露西亞から出れば日本へ教貨を經由して來られると云ふ二線路を併行し聯絡しやうと云ふ考、を日本も持ち、露西亞も持つて其下準備に掛つて居ります是が出来上りますと一つの切符に依つて貨物を直接に送ることが出来ず、旅客も乗換は免れられませぬが切符を買ひ換へるの不便が交通の便利になりませぬ、殊に露西亞人も日本並に南滿北滿に對して自分の商品を出したいと云ふ希望がございまして、吾々が哈爾濱と下相續をした時にも向ふから出るものとせうと云ふので、約二十品も相續をしよう云ふことを言つて來ました、段々向ふから云ふものが來まして連絡が付きまして既に、滿洲では無論露西亞からで又日本からでも是非大連を御通り下さることを希望しますが、さうして日本の露西亞との貿易を益々盛にするやうに御盡力下さることを希望します。(終)

讀者一文庫  
 述懷 あきつゝの舍主人  
 歎ならぬ、身にはあれども、大丈夫か、子たる身の、家のため、世のためなにか、いさをして、たてにさめやと、ちもの實の父の命や、相葉の、母の命のみどもにも仕奉らす、はしきやし兄弟どもに、雲井す、遠き境を、へたてつゝ、國の内外と立別れ、身もたなしする、つくしと、さ心も、ひと室の、たへすかゝる月の、さやけてゐず、よしをなみ、黑白もわぬ、よのささと、慨きこそ、鳥羽玉、夜はたる月も、盈虚は、ありけるものを、春毎に、ちりゆく花も、又さかひ、年はけりけれ、秋なれば、時雨にそむる、紅葉赤き心を、貰てられて、散りても名をは、龍田川、錦となりて、流るゝを、身はう、雲の、あなただけ、月ひつこさは、真太き心は、劍太刀、いつかどくへき、立し心は

筒に納め、そして町田の待受けつゝある室に入つた。

「君が町田君かね、定めて待渡れたであらう、私が清川ちゃんを、」

嘉喜次郎は中々に浸すべからざる威厳を備へた清川の風采を仰いで町田は、何者にか打たれた如く心底から敬服の念を起して、

「これは且那樣でございませう、御不在中に伺ひまして失禮致しましてございませう、私は町田長次郎と申しまして、山城伏見のものでございませうが、宇治の川口松右衛門から書面を貰ひまして、遙々且那樣を便して上京致しましてございませう、素細は奥機に差上げて置きましてございませう、御下では明瞭致しまして、せう々御厄分ではございませうけれども、何分宜しく願ひ申して、」

「御不審は御有理でございませう、實は暫く仔細でございませう、手前の宅は悠々申して、父はモウ老年でございませうゆゑ、今年の春でございませう、神戸の舶來店に乘合せた女がございませう、些ど見合ふと、うしろこそ華族様の大嬢様ととも程美しきものあれば、身装も立派でございませう、然るのみや何方かと云ふなく言葉交しましたのが始りで、到る關係になりました、所が奈何も非常



「よしや身は、人こそ人といはさるめ、こゝろのかきり、つくさくらめや、

反歌

（五十三） 河合柳葉

「なもッ、宇治の松右衛門所から人が来た  
シテ其人は奈阿した。」  
云ふは清川置徳である。

「彼方の事で貴方のお歸りを待受けて居り  
持ち崩したのだ……シテ……又松右衛門がやわ

「今畫面は一逼讀ひて見たが、文中に一度  
死んだ生命を蘇生したのだから、死ぬだけ  
の辛い事も厭はず辛抱する本人の覺悟だこ  
書て、吾余は本人に聞取れてあるが、この  
一度死んだと云ふは、奈何して死んだのか  
な、隨分放蕩に身を捧崩したと書いてあ  
るが、豈夫放蕩の結果生命を棄てにかしつ  
たのぢやあるまい。」

將に名判官の被告人を訊問する體度、町田  
は紙下に汗を流しつつ、

「は愧しに次第でございませうが、眞個放蕩  
の結果、一命を棄てましたのでございませう。  
」遺放の結果棄た、ふむシテ見るど隨分放蕩  
落したものと見ゆるな、何にうればと身を  
持ち崩したのだ……シテ……又松右衛門がやわ

廣 告

來十一月三日天長の佳節に付ては例年の  
居留民一般祝意を表する爲同日午後五時  
り日本人俱樂部に於て祝賀會相催度候間  
賛成相成度此段廣告候也

追て御賛成の諸君は會費金貳圓を添へ京城居留民團役所  
申込被下度候

明治四十一年十月二十七日

(さろは類)

市川田村 熊谷 頴太 盛常 安造

家 京誠明治町一丁目 荒川 繁

明治四十一年十月

南大門通二丁目

香椎魚類販賣部

日丸魚市塲

本町六丁目一番戸

日丸魚類小賣部

（電話 百〇八番）

門迄御運び相成る御不便を除き魚類は勿論牛鶏肉野菜其  
他を販賣仕る様設備を加へ候條弊塲同様御引立の程希上  
候也

本社ハトルコ最大黃製造會社ニシテ其製品ハ原料精選其風味ハ良  
 好無比ナレバ風ニ世帯各國ニ其多ク輸出ナシテ好評ヲ以テ迎ヘラ  
 レツ、アリ卸小賣トモ廉價ニ販賣仕候  
 京城本町四丁目角  
 仁川港本町通 仁川代理店  
 土耳古煙草直輸入大販賣  
 陳者弊場開設以來遠近の  
 秋冷の候各位益御清適奉賀候  
 嫌なく御用命を蒙り從來の市場にては狹隘を告ぐる程の  
 盛況を呈するに至り候段深く奉感謝候從つて今般東部方  
 面御在住者の御便利を圖るが爲め名稱をヒノマルと稱へ  
 (本月廿七日より)本町六丁目一番戸に小賣部を開設し壽  
 京城新町  
 皆春樓

の深い女でございまして、私も行は父、  
も明して妻に致さうとまで思つて居りま  
したる、女の言ふがまゝに父へは内々金  
も餘程浪費ました、其内に父が聞き出し  
て、非常な立腹で殆んど勘當同様な身  
上になりましてござります。  
つて、ハバケチに腋下の汗を密で拭いた

永樂町一丁目  
喜野

告

去年愛菊茶園氏の好評を博したる菊花の  
新種數十種を輸入し今を全盛に咲き亂れ  
本園より雜賣に決し候に付御婦人方御同遊  
御觀覽被下度

菊 花 壇

右は天下第一品の名花山梨縣甲府に發祥した  
るもの東京某伯爵家に於て買求め御秘藏中  
の者なるも菊壇申受け培養したるに驚くべ  
き天下の逸品にして御一見の價値難かに有  
之候者と相傳候

御御津安に依り、御一人前二十錢の茶  
御差出候

御一人前金一圓五十錢に

●貨問 本國八事部に顧客申す所  
一 清國支那 救済部に密電文致して開關請願  
は御承諾を乞ふ永樂村佛國救會 葛山田(六三)  
●古道具賣 本町七丁目 一六號 賣  
●賣地 旭町一丁目の山の手にて風景絶佳  
の土地を畧附にて譲りたし 御覽の御方々  
御來談を乞ふ 姓名在註(七〇)  
一 本町より明治町に入三軒目空地七坪半  
附の貸家あり 櫻井時計店七坪半  
●鐵道、刺繍、扇物、造花、襪織工、英語教授等  
和服仕立物御注文に應ず  
大和町三丁目廿六番露  
●貨地 諸山十五間迄路南大門外四軒  
坪割賃 西河洋物店電三二番八二  
●至極輕便 方法に於て貸金の煩瑣、塵土  
但願會封合 貴店新帳明帳内渡邊一  
●寄信家 六疊四疊半手一温寒 御寄附  
炊事場付の家を惜りたし 氏名在註八九  
●火事場付七坪半ランド九間迄實價  
氏名在註九〇

市下確（大和町） 氏（生七）の消息を知りたし  
 年廿五歳 妻帶者 曾社銀行等の小使に  
 雇はれたる 姓名在社（八八）  
 年廿五才の小僧入用 氏名在社（八三）  
 小供入用 氏名在社（八八）  
 年廿五歳 年廿五歳にして普通教育あり体  
 格極めて壯健何處にてもよし至急取られた  
 氏名在社（八八）

新國社の校正係より、父交角を考證し、三十  
 五元刑事且つ活版事業に關係ある者  
 〇求婚 本年二月八日收八千圓血正作爲  
 十八九の良家の淑女と結婚なし  
 〇弟子入用 但し十四五歳のもの  
 〇求婚 年廿六血誠正侯無子收五十四圓  
 要不同甘廿前前後後作爲血正の女と結婚し  
 〇破産度 朝九時より午後三時の間屋は  
 了し給金不寧年十九保銀入あり止し  
 〇京城又は附近にて豆粕の製造所又は販賣所  
 あり御知らせよ  
 〇氏名在社(五八)  
 〇氏名在社(五八)  
 〇氏名在社(五八)

煙突掃除請負  
ストーフ据付  
電話三四番  
衛生社  
西御料理  
京線五十八番付横通  
寶亭



允昌德商店

圖は昨年軍隊解散の當時暴徒

追跡を極めしも討伐隊のため  
多數の賊徒が時々出没するに

本月廿四日以來約百名の暴徒  
用して各地を徘徊し或は財物

家屋に放火し官衙を襲撃すべし  
悔る可らざるものなり  
當局

前に苦心くしんしつゝありと困もみに

同郡守が人民に斷髮を令した  
 説あるも同郡守は曾て斷髮

準備の稍々緩ゆるみなるの機に乗

●人蔘根病腐に就て

地方に於ける人蔘根腐病は其

故に當局者は之が彌餘方にて過般も日本農商務省農

技師の出張を乞ひ同技師は目

荒城に於て耕作者五十餘名及

跡にては同技師の意見に基き

耕作者に指示し其の實行を  
該演説並に指示の要領は左

なるに拘らず近年著しく其の

として病害の蔓延に基くもの  
中赤腐ブラクコンピュングの注

其の輕病なるものと雖も紅

に演述せんとす

コレラ赤痢に同じく一種の病

狀にして此のもの速に繁殖し養分を吸収する事恰も人蔘が水を吸収して生長するの如き

り病者なるものは其の繁殖は

た増殖すること明白なるもの  
タリヤは肉眼にて見る能い  
れども（千倍の顯微鏡にて表

を經過すれば肉眼にて認め得るなり此の同一なる形本々

は數萬となく繁殖したるもの  
の如く繁殖速かなる者は人養  
其の組織を受けて枯死せし

レ菌が人体内に於て繁殖し

る所のバクテリアは植物体の  
して冷氣なる者に於ては能く  
人夢の如き植物に寄生する者

寄生して病を惹起することな  
類には無害なるも貴重なる物

るが故に損害夥多にして盜賊  
去ると同一なるものなり唯  
て見ること能はざるものなり

盜人が人蔘を奪去するもの  
に我々は此の小盜人を征伐す

々の方法を講究するものにも  
人即ちバクテリアは第一に  
弱きものにして乾燥せしむ

苦痛を感じ終には死滅に歸す  
此植付前には闇地の土壌

薄く賣けて盛夏の時に數日

たゝ木浦某實業家の語る所

100



間もなく又々兄が家をば放逐されて誰にか胸の苦痛を訴ふべき明け暮れ可愛の水兒を抱いては頼りなき身の増進やら越方のことなど思ひ煩ひ時生て此の苦に達ふよりは親子諸共い思ひにどの無分別な心を起せしことしかど頭はなき子供の顔を見てはいかぬ果ては徳の子を善と許りに抱き「ア、此の世に世に誰か知らぬとて與れタト私身の身は何うならうとて與れタトと何處に行かうぞ……」と又哀れども云ふべし

かかる程にナチは長らくの間心配と苦原因となりて本年の三月頃より漸くヒスナリに罹り病ひの床に臥せし

●詐欺か故意か 西阿阿爾住林普魯  
は熊山居住の材木商朴春造との間に作て木  
材買賣の契約を締結し過日其代價に當つべ  
く林より約束手形四枚二千六百五十圓を記  
入して朴に渡したるに其後朴は之を紛失し  
たる旨當時發行の大韓毎日申報に同手形の  
無効なることを廣告し置きたるに關らずも同  
手形を所持せる日本人本目二七七八の兩日  
にして其支拂ひを強制したるも林は朴が紛失  
して無効の旨廣告したることなれば之をを  
拂ひの義務なきを以て之れに取合はず拒絶  
したれば右の日本人は手持無沙汰にて去り  
たるも此後如何なる手段を用ひんも計られ  
ず此 旭池町二丁目辯護士大崎熊之商店  
代人松本徳次郎より西部警察署へ訴へ出

金銀眼鏡一個を窃取し何處かに妾を匿したる  
 徒行衛知れざりしが本月廿五日前記窃取  
 商店 覗き

▲丁子屋 韓國に於ける洋織物雜紗  
 商の覇王也二層建の巨家傲然として群小商  
 賈を睨するの概あり主人は小林源六氏三  
 重の產當地に支店を設けしは明治三十七年  
 三月爾來本年に至る連綿四年の間は韓國  
 國內の染織各業の用途を占  
 據の盛大を見るに至れり本支店の従業員者三百  
 餘名以て其の商勢の通常一様にあらざるを  
 知るに足るべし今試みに主人小林氏が座  
 の錦といふを聞くに「如何なる事業と雖  
 根柢なる所謂射的事業は決して志す勿  
 誤つて倖得ることあるも斯かる財は  
 して持續すべきものに非ずのみならず一

六日體山溪江通り四丁目三十六番戸太田源  
 太郎(三)は二十九日何れも腸管弛緩に罹り  
 青皮病院に送らる

毎日  
 種痘

南山町二丁目  
 植村病院  
 電話三三〇番

京城の初氷  
 去る二月五日の氣壓  
 通過後は高氣壓滿洲地方に擴張し北風強  
 既に内陸地方は氷點下數度に降りし當地  
 に於ても廿八日は前日に比し平均氣温六  
 八の下降を呈し漸次寒氣増進して昨朝未  
 は氣温零度に達し濯水を結へり之れ本年  
 初氷にして昨年に比し五日早し殊に南三  
 は結構も甚しければ果樹等に注意すべ

うちやんとか(流球の女)▲タイヘン寒いあ  
ります支那人

たいと思つてゐるんですが師匠さんは誰か  
がよい(皇子姫の小分)▲昨今の寒さは昔  
より(支那人)

西の風景は後略

三十日午前六時各地気象概況

今朝薩摩は一番に高氣壓にて占有せられ沿  
海地方は北の風吹き東海岸は南其他は晴  
明にて気温は午前比し大に下降す

廣 告

追 加  
 第二圖  
 圖書目錄  
 進目  
 來る十一月十一日  
 着時間を改正致候  
 急行列車 時刻表  
 度、短縮致候  
 益山發 前二時后  
 南大發 后八時后  
 平壤發 后三時后  
 新義州發 后三時后  
 各列車發着詳細の義は各  
 會社式會社式  
 會社式會社式

[illegible]

度くの脚すら炊いてやらず不相親愛  
味に身を持ち出し土臺妻子のことな  
向に振り向きもせざるよりツチの病病  
にくゝ重なり行き今は肉削け骨黒く目  
いたくしき姿はなりつるが誰可憐  
は母と共に臥床に寝ねる嬰兒のしき  
乳房に縋りて乳を求めつれ元よりし  
回の食事はれろか遊藝物さへ口に收せ  
体のナドで一滴の乳さへあらう筈は  
不ては嬰兒は藥を限りに注ぎ明お毎に  
湯をぢやがると思ひ苦しき床をやう  
離れて棚の片栗を溶かき嬰兒に與へ  
何分を咽に通して一時の飢を過ぎ居  
も元より斯かることの何時もや  
もあらす母子の身体は漏が上にも衰  
ては瀕死の境に陥りたるより近所の  
も氣の毒に思ひ目より惡意の難れ彼  
た所が交るゝツチの枕邊に來りて

**酌婦の轉轍** 岐阜縣惠那郡阿木村  
百廿二番地櫻井小七(こいふ)といふは日置觀音  
當時南濃州・額原坑に入夫として雇はれたる  
中、同地東洋ホテルの女中東雪江(こゑ)といふ  
女とチョツクラあひ仲となつたが、原  
より味は夫婦の約束に違ひ二人手に手  
取り、睦の七ツの鐘を相圖に雪江は東洋ホ  
ルを抜け出し男と共に旅順に駆け落ちた  
が天道様は有らうか米の飯に有りつかれ  
已むなく女は前虎の安賣りと出掛け暮さ  
る中何もう思はしく繁吉せざるより昨年  
月頃仁川に渡り又々同地で淫賣を爲せし  
此の女何ういふ都合か客取りが下手にて  
ツバサ貰つて與れる男がだちうと今度一  
ツバが所變れば男も變るだらうと今度一  
處に河岸を替へ本月十五日頃地町一丁目  
田鼠といふ料理屋に酒席八十圓にて酌婦  
公に住込み碎身粉骨に客取り怠りなかつ

▲伊藤組　商店はわらざるも、營業種目は上商店の性質と毫も異なるな。營業種目は力車業引越、遊藝會の設備及び人夫諸費なるが就中人方事業に於て其の重なるもの多し場所は今町三丁目の四辻、統笠御印御司令官閣下御用車」の二有版は見れるものとして、ツグ廣國、抜かし店前入方車の、出で常にかゝる事なく、且つ流れく男の景氣好は誰の眼にも何となき營業振りの偉大なを想ひ、主夫人は伊藤名松の兄松樹の退つて三十八年、道を張らずに、後へは違ふといふ持つて生れた江戸兒氣性質に之義氣に富み然諾を重んずる男の中の男一

<p>             山本願寺説教              後七時半より説教あり              龍山本願寺説教              本日午後七時より伊藤開教使の説教あり         </p>	<p>             同可娛欄(廿一)              狂歌(本紙廣告續込) 志雲              青々園茶簿              ね茶は字茶茶碗は清水品がよくてせい／＼              勉強店は繁昌              池田病院         </p>	<p>             山本願寺説教              今日土曜日に付              平山牛乳              平山のちひは添ひねのはよりもふびん              乳子を救ふ親王              日の丸の旗で得意をなびかしてかけねも              はすこまかしもせず         </p>
--	--	---

雪  
 諸  
 集  
 金  
 登  
 記  
 漢  
 城  
 府  
 手  
 續  
 京  
 城  
 本  
 町  
 一  
 丁  
 二  
 番  
 地  
 鐵  
 山  
 測  
 量  
 書  
 民  
 役  
 所  
 前  
 岡  
 田  
 事  
 務  
 所  
 取  
 次  
 電  
 話  
 六  
 二  
 二  
 金  
 錢  
 取  
 借  
 諸  
 君  
 仲  
 介

平  
 日  
 詳  
 明  
 美  
 觀  
 代  
 に  
 て  
 通  
 呈  
 十  
 行  
 園

奉  
 候  
 願  
 候  
 十  
 月  
 十  
 六  
 日  
 京  
 城  
 新  
 聞  
 社  
 ●  
 龍  
 山  
 支  
 局  
 設  
 置  
 ●

今  
 般  
 漢  
 江  
 通  
 三  
 丁  
 目  
 に  
 支  
 局  
 を  
 設  
 置  
 し  
 社  
 員  
 中  
 村  
 弘  
 を  
 特  
 派  
 し  
 て  
 該  
 地  
 土  
 に  
 於  
 け  
 る  
 通  
 信  
 營  
 業  
 派  
 の  
 事  
 務  
 を  
 取  
 扱  
 は  
 し  
 め  
 候  
 へ  
 ば  
 一  
 層  
 御  
 愛  
 讀  
 の  
 如  
 奉  
 候  
 願  
 候

販賣所は京城・仁



**新案國旗留**

壹個定價 貳圓  
貳個定價 肆圓  
肆個定價 捌圓  
拾個定價 貳拾圓  
拾伍個定價 貳拾伍圓

但取付料共

明治四十一年一月

血府鐵道管理局

新案國旗は留希銀製コーラルター陸奥美  
品にして従来の縄紐等にて結付の不体裁  
繁雜を除去至極輕便にして体裁もよく  
地は勿論韓國釜山に於ては既に本年一月  
全市に取付大に好評を得たる品に御座  
間何卒陸續御用付られ度事希望候敬白

京城南山町一丁目  
長谷内

旗交舎

(電話六七三番)

川、龍山、永登浦の各所あり

満たしやうなほど親身も及ばぬ心切にツ  
 返し眞に眼が「皆さんに對しても早く  
 通者な身体にならずに申し釋けなし」  
 兄難に來る人毎にいつつ其の中  
 氣は氣がらとやらの替へ居るの中  
 病氣は「ツツ」と快方に起き輝く間に  
 バリと元の身体に歸りけるがさるにて  
 の仕業は少しも論はらず心の煩悶は以  
 借し寒う病の身の苦痛よりも切なかり  
 運命を天に任せし眞淑のツツはタト  
 は悲みと憂へと嘆きの犧牲となつて悶  
 んども如何なる方法を以て夫をば  
 の調へし救ひ上げばやと決心し今を接  
 慮らざる仕打にも願せや手を替へて  
 強意見を爲すに至りしかぞイツカ夫

手は元の手、足も元の足の如く。夫の病も斯うな物に成つて又々雪江を以て南大阿外日本に賣り飛ばせしを雪江の情女櫻井が聞か  
ずして眼を丸くし早速日本へ赴き五千圓  
現金でやゝから三十圓は證券とし女を渡  
與るやうと頼み入りたる主人人はナ  
らぬといふなら警察沙汰にして其の上で女となすべしとのより櫻井は女を連れ  
主人与共警察署へ行くと途中櫻井は女と別れて何時の間にか通じし何れかを姿を隠したる時主人は吃驚仰天し其の旨警察へ告げ出でて所警察にて是此程兩人を永登連捕へたりといふ

て雪枝をはたタツ七圓の差の八十七圓に初音町の日監亭におツ箱めしが又同亭の爺といふが虎ど鬼とを混せぐり返へした人人物にて又々雪江を以て南大阿外日本に賣り飛ばせしを雪江の情女櫻井が聞かずして眼を丸くし早速日本へ赴き五千圓現金でや゠から三十圓は証券とし女を渡與るやうと頼み入りたる主人人はナラぬといふなら警察沙汰にして其の上で女となすべしとのより櫻井は女を連れ主人与共警察署へ行くと途中櫻井は女と別れて何時の間にか通じし何れかを姿を隠したる時主人は吃驚仰天し其の旨警察へ告げ出でて所警察にて是此程兩人を永登連捕へたりといふ

て觀や亭をつをり力を訴に  
天を燒いて炎々其の威を逞ふせんか昨の力車夫は忽ちして是れ一個勇壯活潑な消防夫と變じ主人及松氏は先頭にボンブ警ベルンの音も勇ましく命を的に盡力力有りさば又却かに目醒しきのなり今宵貸家を諸所に有る資産又豊かなり云々したる金銀眼鏡を米倉町の質商千屋屋田二郎方へ十三圓に入賃し南大門外吉町一丁目志村某方へ潜伏し處なるを酒密探の大城探知の探知する所となり午後七時半志村方に驚き込め難くを取押へ荒三は昨日檢事局へ送られたる

●無銭の醉人 旭町一丁目七番戸大火  
松方伊本河邊( )は一日午後十時長町二丁目飲食店上野外水車方にて一團

友) ▲君はよく其の事を尋ねるが仰も其の如く  
 あつての強骨折り一寸伺ひますと小僧  
 渡し舟呼べど返さぬ情に茲此れは小生  
 なるが若し之れを其角先生が歌つたこと  
 は今世に於て大に歡迎さるゝ筈なん

大和町堂丁目貳百四番戸(乳山)  
 爲春堂醫館  
 古 城 側

今般贅化病院副院長  
 辭左記處開業

事玉笑星の小僧 ▲近頃  
 見物しましたが中々うま  
 御存知の方は一報外れ報順造上へ(思堂)

町○目の靴屋の娘さん一何見ぬが  
 (文) (庫)

各位益御隆盛之段奉  
經日に増繁盛に赴き  
か三週年の祝意を表  
として粗品進呈仕度  
和洋紙、和洋諸帳  
新版唐紙形、文房具  
折手本、畫帖、其他  
貴婦人用さくら紙發

週年祝賀賣出  
賀候隨て弊店儀當地開  
候段全く御愛顧諸彦の  
する爲來る十一月五  
何卒平素に倍し御來店  
帳簿人名簿  
類活版印刷  
小間紙類一切  
同  
賣元

出し廣告  
本店以來三週年の星霜に  
賜と奉拜謝候就ては  
日り十日迄五日間紀念  
石御愛顧の程偏奉希  
本町壹丁目郵便局前  
北内商店  
(電話 近目開通)  
本町五丁目  
同支店  
(電話 架設中)

○土耳其金口煙草 G D  
インペリア  
茶褐色スホル

トル  
**各種**  
歐米雄 京城代

代理店  
雜貨商  
京城本町  
六丁目  


岡野商店

電話(五七一番)

-399-



H

富田靴店本店  
 同 幸町六丁目  
 富田同支店

業品目

○ 最新式眞筆  
○ 膽寫版發賣元

▲ 諸官衙用達 ▼

石名營業其融實迅速を旨として勉強仕候間  
 多少に不拘御用命被仰付候  
 明治町一丁目  
 山邊仙十郎  
 電話三十七番  
 新開  
 秋山忠三  
 高木久馬  
 京橋新開  
 六三